茨城大学の今を伝える情報誌［アイアップ］

up

Ibaraki University Press 11

茨城の食と農、「知の拠点」から。

産・官・学一体で、茨城のあらたな農業の道を拓く。

ALUMNI
わが誇りの先輩たち
株式会社 楽天野球団　菅井 悠香さん

学生インタビュー
「The 茨大生」
正田真悟さん

茨城大学
Ibaraki University

iUP Ibaraki University Press 11

CONTENTS

04 茨城の食と農、「知の拠点」から。
産・官・学一体で、茨城のあらたな農業の道を拓く。
OBカメラマン金田幸三の**キャンパス探訪**
「1dayキャンパス in 守谷」編

14 ALUMNI わが誇りの先輩たち
菅井悠香さん 株式会社 楽天野球団

18 学生インタビュー「The 茨大生」
正田真悟さん 人文学部3年生

20 iUP TOPICS
IBARAKI UNIV. PRESS **茨城大学 1dayキャンパス in 高校**
わたしの仕事
永野綾子 学術情報課 図書館本館サービスグループ
Math in Cinema **映画の中の数学**
長谷川雄央 理学部准教授

22 **野心満々たれ**
「未来の記憶」影山俊男 理事・社会連携センター長
編集後記

23 サークル紹介 **バドミントン部**

ONE DAY challenge.
It's a new education style

茨城大学1dayキャンパス in 守谷
「農＆食のグローバル化への地域のチャレンジ」

あの街へ、この地域へ、茨大がやってくる。

2017年11月4日（土）、茨城県守谷市の守谷市中央公民館で「茨城大学1dayキャンパス in 守谷」が開催されました。県内外から約100人が来場。国立大学協会との共催による、本学の初めての試みとなりました。

「1dayキャンパス」は、茨城大学が様々な地域や学校へ出向き、教育・研究等の活動への興味を喚起し、理解を促す企画。それに先立つ9月に、農業を資源とする地域づくりの取り組みを進める守谷市と本学農学部との間で連携協定が締結されたことを記念して、守谷市が「1dayキャンパス」の第一弾の舞台となりました。

テーマは、「農＆食のグローバル化への地域のチャレンジ」。

グローバル規模で食品材料の開発・販売を展開する不二製油グループ本社株式会社社長の清水洋史氏のスペシャル講義を筆頭に、本学卒業生でコメの大規模農業経営に取り組む有限会社横田農場の代表・横田修一氏の講義や、一般社団法人もりや循環型農食健協議会の伊東明彦氏を交えた本学教員たちとのパネルディスカッションなど、茨城県の新しい農業のあり方と本学への期待などが熱く語られました。

キャンパスを飛び出して地域に拓かれる新しいキャンパスという試みから、新たな茨大の教育チャレンジが始まります。

主催：茨城大学
共催：一般社団法人 国立大学協会
後援：守谷市、茨城県、一般社団法人 もりや循環型農食健協議会

「茨城大学1dayキャンパス in 守谷」の模様（2017年11月4日）

茨城の食と農、「知の拠点」から。

産・官・学一体で、茨城のあらたな農業の道を拓く。

「今日は、このあたりの農家の方々が作っている無農薬の野菜の販売と、イベント関係者の方々へお弁当を用意してきました。野菜がメインのお弁当。ちょっと珍しいでしょ。お肉も一切ないので。喜んでいただけたか、ちょっと心配ですね（笑）。」西辻宏さんは特設テントの下、野菜を並べながら、イベントの準備に追われている。

秋、紅葉深まる2017年11月の午後、守谷市の中央公民館のホールにおいて、「1dayキャンパス」と銘打った、茨城大学初のイベントが開催された。大学のキャンパスで展開されている教育や研究を地域に発信しながら、大学から離れた地域、ふだん大学へ足を運ぶ機会のない人たちとの交流を深めることを目的とする試みだ。

第一回の開催は、ここ守谷市。その2カ月前に本学農学部と協定を締結した。守谷産ほうれん草のパウダーの機能性成分の研究、畜産物の商品開発、持続可能な地域づくりや人材育成などの分野で連携を推進する。前述の西辻さんも、

「1day」に込められた地域からの期待

国は、地域資源を活用した新たな産業の創出を促進するなど、農林漁業の6次産業化を推進し、その輸出額の目標は1兆円。農業生産高全国2位の茨城県は、その牽引役を担っている。自然の利に恵まれた茨城の豊かな農業環境をいかに持続可能なものとして後世に受け継いでいくか。総合大学・茨大の取り組みを紹介する。

1# 商品だけでなく、食材を作る生産者の思いも輸出してほしい

鈴木光樹さん（農学部生物生産科学科３年生）

常陸大宮の実家では、祖父母がネギを中心に農業を営んでいます。食卓に上がるネギは、家の畑で採れたもので、いつも、あるのが当たり前みたいな存在でした。お味噌汁の具だったり、お鍋に入れたり。脇役ながら、いつもいい味を出しているところが大好きです。

我が家のネギのように、食は「あるのが当たり前」と思われがちですが、食材には、収穫されるまで積み重ねて来た苦労があります。土を耕し、肥しをやって、収穫して、料理して・・・。祖父母もそうですが、毎日毎日たいへんな作業。なのに、どこかに楽しみを見出している。みんなで試行錯誤して生まれてきたものには、それぞれに工夫がしてあって、最後にみんなで喜びを分かち合うみたいな。農学部に来て、一人暮らしを始めて、そんなことを感じています。食材を作る、ちゃんとした生産システムを海外に運ぶ上で、私たちの食文化も広めてほしいなと思いますね。

一般社団法人もりや循環型農食県健議会の会員のひとり（自然素材「西辻弥」代表）として、連携協定に関わった。

「この地域には大学がありませんので、若い学生の人たちが自身の学業をかねてこの地域と関わってくれることに期待を寄せています。」（西辻さん）

守谷市を含め、現在、農学部が取り組んでいる「食」と農業の最先端の研究・人材教育は、産・官・学の連携として、多くの自治体や農業関係者から注目されている。

その背景に、茨城県の農業事情がある。ひとつは、人材の確保である。

急げ、食と農のグローバル人材育成

農業大県と呼ばれる茨城県。それを裏付ける指標として、農業産出額を見てみると、茨城県は2015年まで８年連続で全国第２位を誇る。県の農業政策課長の大朏（おおつき）徹さんは、「北海道を除けば、茨城の農業は全国でトップだと私たちは考えています。一方で、農業従事者の平均年齢は66.2歳。他産業以上に高齢化が進んでいるのが現状です」と語る。

たとえば、水田農業の場合、県下でも稲作の規模は年々拡大傾向にあるとはいえ、全国で稲作の集積化が5割を超えるなか、茨城県は３割に満たない。阻害要因は担い手不足だ。

人材の確保という観点で、もうひとつ課題になっているのが、食のグローバル化に対応できる即戦力だ。

折しも、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される。県の農産物のグローバル化を図るには、絶好のチャンスだ。しかし、選手村では「グローバルGAP等高い水準のGAPで作った農作物しか受け入れない」と規定されている。4500億円に上る県内総生産のうち、2000億円が葉物。首都圏の台所として、特に一次農産物に関しては、出荷基準を満たした食材の確保が、待ったなしに切迫しているわけだ。

そして、食の国際展開・・・。この次世代を見据えた新たな戦略や、昨今食のグローバル化で重視される「HACCP（ハサップ）」の話に触れる前に、日本の農業が抱える課題を少し、本学の取り組みと照らし合わせて整理しておきたい。

後継者確保、農業従事者の不足は、茨城県に限らず、深刻な社会問題と言われて久しい。しかし、農学部の久留主泰朗学部長は、大学や学生たちのトレンドは決して「農業離れ」と一致しないと考える。

「全国の大学では、農学系学部が増えています。徳島大学や龍谷大学の他、新潟県には新しい農業大学が開校し、群馬大学、福島大学でも新たに学部を設置することになっています。」（久留主学部長）

事実、茨城には800ほどの農業法人があり、こうした法人に就職をする「雇用就農」も年々増えている状況だ。農業は、新しい産業として、見直され、進化しているといっても過言ではない。

本学では、こうした動きに対応して、いち早く、農学部の改組を行っている。2016年度から他学部に先駆けて「クォーター制」を導入し、2017年には学科を再編。これまで以上に、「食」のエキスパートを育成・輩出することで、国や茨城の農業を支えようと邁進している。

グローバルGAPへの対応も順調だ。学部に隣接した大規模な「附属フィールドサイエンス教育研究センター」（センター長・小松﨑将一教授）は、学生たちの農業実習の場だ。種まきから収穫、トラクターの点検整備も行う。これまでも地域に向けた食農教育、あるいは農家向けの環境保全型農業の講習などを開講してきたが、食や農の環境が国際化に向けて大きく舵を切るなかで、センターではグローバルGAPを含めた、農業生産工程管理の指導に本格的に取り組み始めた。

「グローバルGAPの認証をどう取得し、生産を進めるのか、農家の参考になるように、今までの実績を踏まえた指導を実際に施設で見せて体験できるような農場を作ろうと計画しています。」（小松﨑センター長）

グローバルGAP（Good Agricultural Practices）：国連食糧農業機関（FAO）の定める、農業生産の環境的、経済的及び社会的な持続性に向けた国際的な取り組み。現在、世界120ヶ国以上・15万件を超える認証件数となっている。グローバルGAP認証を受けることで「安全で品質の良い食品・非食品の農作物であると世界的に認められる」ことになる。

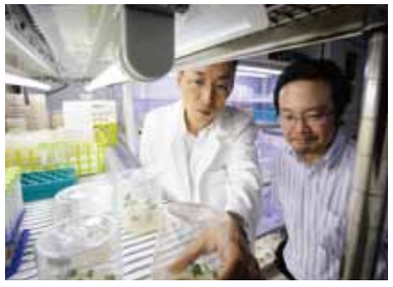
HACCP（Hazard Analysis and Critical Control Point）：食品の製造・加工工程のあらゆる段階で発生するおそれのある微生物汚染等の危害をあらかじめ分析（Hazard Analysis）し、その結果に基づいて、製造工程のどの段階でどのような対策を講じればより安全な製品を得ることができるかという重要管理点（Critical Control Point）を定め、これを連続的に監視することにより製品の安全を確保する衛生管理の手法。（厚生労働省）

2# 茨大には、茨城の農業を一番知っている大学であってほしい

大朏徹（茨城県農林水産部農業政策課長）

新規就農には、２つの形があって、みずから農業経営を始める形と、農業法人に就職をする「雇用就農」と呼ばれる形態があり、現在、茨城ではこの農業法人が800ほどあります。いろいろな農家や雇用形態があるなかで、大学の研究者の目線で農業を見つめ、大学のような専門機関で学んだ知識や経験を茨城の農業に活かしてもらえることが県の願い。なかでも、茨城大学には、私も農学部OBの一人として「茨城の農業を一番知っている大学」であってほしいと願っています。

かつて、茨城県の農業産出額は、米、園芸、畜産がそれぞれ3分の１くらいずつ占めていたのですが、現在では米が2割を切り、野菜や果実、花などの園芸が５割を超えています。園芸は収穫に非常に手間がかかります。人の力でないと難しいと考えられてきた分野ですが、こうした現場に工学部などの実績を駆使してロボット技術などが投入されると、安定的に大規模な農業運営が展開できると考えています。（敬称略）



農学部は2017年度、生命科学や食品の加工、流通、安全性に関する知識や技能の修得を目的とした「食生命科学科」（国際食産業科学コース・バイオサイエンスコース）、農業科学コースと地域共生コースから成る「地域総合農学科」の２学科・４コースを設置。食品の安全に関わる知識を持つ高度な専門職への人材輩出をめざす「アジア展開農学コース」（大学院）は英語で開講。

知の総合力で、茨城の農業を支える

本学農学部は、AIMSプログラムというアジアの大学との留学プログラムを通じて、多くの留学生を受け入れている学部だ。こうした留学生の教育を通じて、日本で実習を受けた圃場の管理、収穫方法、あるいは生産物の管理などグローバルGAP認証に基づいた知識を世界に発信したいと考えている。

農学部のこのような動きは、総合大学としての茨城大学全体の取り組みとも関わってくる。食や農業の発展に寄与する機能をさまざまな視点・考察から包括するところが、総合大学の強みであり、かつ、地域社会の期待するところだ。

茨城の食を世界へ発信するとき、地域の食文化や伝統を理解し継承していく取り組みは欠かせない。教育学部の石島恵美子准教授は、地域文化と郷土料理の深いつながりに注目しながら、家庭科を担当する教員の育成に努める。

「郷土料理が廃れ、地域の食文化が消えていくのは、その土地独特の生活が失われてしまうということ。海外に目を向けながらも、そういう地域独特の食をいかに守っていくかが大切ではないかなと思いますね。」（石島准教授）

消費の世界からマーケティングを捉え、茨城の外食産業や農業の未来について提言するのは、人文社会科学部の今村一真准教授。これまでのコンセプトにとらわれないで「全方位的に農業の可能性を論じるべき」と、新しい視点で農業を見つめる発想の転換を呼びかける。

「たとえば、県内のある飲食チェーンでは、東京都内のアンテナショップである『茨城マルシェ』をコーディネートしているそうですね。日本酒の蔵元では、東京でストーリー性のあるバーやレストランを展開しています。茨城の珈琲専門店として知られる会社でも、やはり独特の世界観を前面に出してオリジナリティに付加価値をつけている。海外への働きかけを含めて、次の消費世界へのステップを踏める土壌が、茨城にはたくさんある気がしますね。」（今村准教授）

農学部では、こうした大学の総合的な知識と研究に支えられながら、県と連携し、茨城の農業振興に積極的な関わりと信頼関係を深めている。たとえば、現役農家や就農希望者向けに農業の技術や経営についての講座を提供する「いばらき農業アカデミー」に参画。特に、食生命科学科を中心にした講座では、EUなどで採用されている食品の安全管理指針であるHACCPについての知識・技術を提供する。「県内の食品加工の技術を底上げして、グローバル市場への輸出促進と、地域農業を豊かにする一助になれば」と、久留主学部長が先頭に立って、本学の強みを余すことなく、産・官・学の連携に還元すべく奔走する。

茨城のこれからの農業を考えることで、地域の力がひとつに結集する。その一角に大学の知の研鑽が活かされるのである。

そこで、製品の安全を確保する衛生管理手法「HACCP」への対応である。

2014年に茨城貿易情報センター（ジェトロ茨城）が発足し、県が農畜産品の輸出事業に本腰を入れ始めて３年。少子高齢化と人口減少にともない、県内市場の縮小化に先手を打ち、輸出振興の活性化を支援する。常陸牛の輸出量など成果の出ている輸出品がある一方で、農作物などの加工・新商品開発の促進は遅れがちだ。農業大県としては、何としても販路を開拓したい分野である。

3# 地域の食文化とともに、食のグローバル化を

石島恵美子（教育学部准教授）

かつて消費は、商品をどう選ぶかというのが消費者の関心事でした。2012年に消費者教育推進法が成立し、時代は少しずつ、消費における「正しい選択」が社会全体を良くしていくという意識に変化しています。食に関して言えば、食の産業のあり方に目を向けながら、いかに健康に良い商品を維持していくかが問われるようになりました。消費者自身が知識を持ち目を養い、いいものを選べるようになることが、社会全体を変える第一歩だと言ってもよいでしょう。

食の歴史、伝統、地域の食文化も私たちにとって大切なものです。和食がユネスコの無形文化遺産に登録されたのは４年前。世界が認める和食の根幹は、郷土食の文化の豊かさにあります。地域の食を支え、残していくためには、その土地の食のルーツ、アイデンティティを理解し守ることが欠かせません。それらは、民族を超えて、だれとでも肩ひじ張らずに語り合えます。食のグローバル化の課題を考える際のコミュニケーションツールになりうるからです。

4# 付加価値の有無を上手に生かした戦略を

今村一真（人文社会科学部准教授）

消費の世界で生き残るには、付加価値を高めて、どの消費のシーンに入り込んでいくかが大きなポイントになります。私はマーケティングが専門ですが、こういう視点で茨城の農産品を見ていくと、検討の余地が残されています。

たとえば、干し芋はさつまいもに付加価値を与えた商品ですが、「干し芋はサラダにも使える」「フランス料理やイタリア料理にも使える」という発想にはなかなか至らないようです。一方で近年、３PL（サード・パーティー・ロジスティックス）という、物流機能を専門とする企業に委託する形態が注目されています。ここでは、むやみに商品の付加価値を与えようとせず、新鮮な野菜の従来よりも広域なエリアでの販売を可能にしています。こうした物流サービスを活用することで、首都圏に近い茨城が強みとしている農産品など、日本の食糧供給をリードしていく牽引役になれるのではないかと考えています。

新研究棟は、HACCP教育・研究の魁（さきがけ）

県の大朏農業政策課長は、「本県の農家でも農林水産省などが推進する6次産業化をめざして、HACCPに取り組みたいと考える方が増えています。県でも、農業大学校や農業総合センターなどでそうした期待に応えたいのですが、HACCPに特化した施設を運営するまでには到底至っていません。『いばらき農業アカデミー』で茨城大学にこうした講座を依頼したのは、そういう背景があってのことです。その効果は、相当大きなものがあると思っています。」と語る。

農業生産が盛んな茨城で、「農林漁業生産と加工・販売の一体化」、つまり農林漁業の6次産業化が進み、農商工連携が広がれば、食品関連の企業の誘致に大きな弾みとなるだろう。その時に求められるのが、HACCPの知識を持った人材なのである。

こうした一連の国際化の流れをふまえ、農学部では、来春、新しい総合研究棟「フードイノベーションセンター（仮称）」を開設する。HACCPへの対応を軸に、農学の実務的・国際的な人材を養成する計画が進んでいる。総責任者を担う農学部の宮口右二教授は、「さながら、工場に近いものができるという印象です。加えて、企業・事業所が共同利用できる『インキュベーションラボ』を設けることで、私たちの基礎研究と商品開発などの実務的な研究を一緒に行える環境を整えています」と新研究棟の充実したコンセプトを紹介する。大学としては、他の大学に比類のないHACCPの研究・実習・教育に本格的に取り組む施設が完成することに、行政からも民間からも熱い期待が寄せられている。

農林水産物・食品の輸出額は2015年に7452億円に達し、３年連続で過去最高を更新している。国は、2019年までに同輸出を１兆円とする目標を掲げ、「攻めの農業」を前面に農業改革への理解を訴える。東京オリンピックの開幕は、2020年。在学中にこの一大イベントを迎える学生たちも、そんな時代の風に敏感だ。

「1dayキャンパス in 守谷」の司会進行を務めた農学部3年生の中山大暉さんは、「楽農人（らくのうど）」という茨城県立医療大学との農業系サークルを束ねる。部員は茨城県立医療大学の学生も含めて、80名。大所帯な学生サークルである。

「今、東南アジアの富裕層向けにいちごの輸出が増えているんですね。ところが、輸出するための課題が、結構あるんですよ。コストもそうですが、傷んでしまったり。イチゴの品種はたくさんあるので、どういう遺伝子のものが輸出に向いているのか確かめたり、輸出向けの品種改良に役立てる材料を見つけたり、そんな研究をしています。」（中山さん）

人文社会科学部の今村准教授は、「見たこと、感じたことに責任と自信を持って発言していくことが、学生にとってなにより大切。それがまさに大学の役割ではないでしょうか」と、新しい農学部の挑戦にエールを送る。楽農人の農学部生たちのような活動は、まさにその一例だろう。プロから見れば、稚拙な提案もあるかもしれない。採算が合わない企画もあるだろう。しかし、学生たちのきらっと光る、生き生きした姿は、大学のみならず、地域社会の明るい未来を映し出す。国や県の求める人材もまた、そこにある。

中山さんの語る意気込みが、そんな世の中のめざす指標の正しさを示すかのようだ。

「新しい産業にしてやるぞ、もっと農業は変われるぞ、そのくらいの気持ちで頑張りたいですよ。茨城はこんなにすごいいいものを作っているんですから。」

5# 農業に関する開かれたキャンパスをめざして

宮口右二（農学部教授）

食生命科学科（国際食産業科学コース）では３年生の後期に海外での実習を必修にしていますが、農学部では現在、語学力の育成に力を入れています。留学生も多く、農業には国際化が欠かせないと意識づけられる環境が整っています。座学だけでなく、食の衛生管理すべてを実際に国内外で体験するという貴重な経験を積みながら、これからの農業のあり方をよく学んでほしいです。こうした環境に、新しく「フードイノベーションセンター（仮称）」が加わることになります。

国公私立に関わらず、農学部や食品関連の学科ではHACCPの教育は欠かせません。食品加工のHACCPの教育施設を整えているところはありますが、茨城大学の規模でHACCPに本格的に取り組むところは珍しいでしょう。研究スペースや機器を共同使用しながら、企業とともに研究できる施設はほとんど例がありません。学術研究に開かれた環境を提供したいです。

6# 2019年4月に新設される新研究棟へ期待高まる

フードイノベーションセンター（仮称）農学部・阿見キャンパス

国際基準に対応した食品や農作物の生産、加工に関わる人材育成に力を入れている農学部では、農作物の加工実験施設を備えた研究棟を2019年4月に新設する。研究棟の新設で産学連携の研究の場としても活用、地域農業の活性化につなげたいと考える。

新設される研究棟は、３階建て、延べ床面積２千平方メートル。阿見キャンパスに建設される棟内には食品衛生管理の国際規格HACCPの基準を満たす加工実験設備を設置。さらに、研究室や実験室、講義室なども設ける。さらに、企業や自治体、農業従事者などが教員と連携して製品開発を行う「インキュベーションラボ」も設けられる。

農学部では、新棟建設に先立ち、来春から附属圃場の一角を使い、国際規格「グローバルGAP」に対応した農場も新設する。学生らがグローバルGAP認証の仕組みや、実践的に理解する場として活用する。

1 今日は屋外誘導。
12時くらいから立っています。

2 子どもがおりますから、
食については、いつも気になります。

3 学生時代の研究は、
干し芋でした。

6 司会は、大学を背負っているようで
緊張しっぱなしでしたよ。

4 「最近しっかり野菜を食べていなかったので、
元気になりました」という
声をいただきました。

プロの農家、経営者の意見は
聴いていて説得力がありますね。

5

7 農家の方々を前に話すのとは、
また違った緊張感がありました。

iUP TOPICS

PRIVATE INQUIRY

OBカメラマン金田幸三の**キャンパス探訪**

「1day キャンパス in 守谷」編

「大学でこんなことも勉強しておけばよかった」などと後悔するのは、僕だけではない気がする。この日、大学を飛び出し、一日だけのキャンパス講義。普段キャンパスでは見られない、親子連れや大学の卒業生、会社員など様々な方々に、研究現場から直接の声を伝える講義だ。食と農について学びつつ、学び方の自由さや柔軟さについても考えさせられた一日だった。

1 白井るみさん
農学部2年生
市村香澄さん
茨城県立医療大学看護科1年生

「楽農人」という、医療大と茨大のインカレ・サークルなんです。「すごく楽しいですね。私は農業が専門ですけど、医療大の学生の違った視点がいつも新鮮で」（白井さん）「私も医療の世界だけでなくて、農業の話も聞けるので、新しい発見ばかりです」（市村さん）

2 小林実樹子さん
参加者

子どもと一緒に参加しています。東京医科歯科大学に勤務していたものですから、（パネル展示に）動物の口腔内の細胞のことなどがあって、興味深く見させてもらいました。守谷に来て10年。農作物のイベントなどには、よく参加しています。

3 渡邊さゆりさん
公務員（茨城大学卒業生）

今、国のほうで「農業白書」の作成に関わる仕事をしています。茨城の農業には魅力や可能性がいっぱいあるので、私も社会人になったからには、学ぶだけじゃなくて、発信する立場にならなくちゃと模索中です（笑）。

4 西辻宏さん
農業従事者

この地域には高校が１校あるだけで、大学はございませんので、こうして大学がやってくるというのは、地域の活性化につながるのかなと思いますね。大学がこうしてやってくることで、地域でもいろんな展開が拓けてくる気がしますね。

5 相澤旬一さん
参加者

会社員です。つくばエクスプレスの吊り広告を見て参加しました。食に対しては、日ごろは無関心に近いところがありましたが、茨城の豊かな農産物の話、特に経営をされている方の生の声は、とても興味深かったですね。

6 中山大暉さん
農学部3年生（「楽農人」代表）

中学のときから家庭菜園を作って、高校生の時から近くの農産物直売所で売ったりしていたんです。評価が良くて、今では畑１ヘクタール借りて、品目も増やして、給食センターとか都内の学校に卸したりしているんですよ。

7 横田修一さん（写真中央）
登壇者

（農業の分野において）大学や研究機関に求められるニーズは、どんどん多様化していて、現場を理解して、現場に入り込んで一緒に今の課題を解決していくことが大切で、今回のイベント（1dayキャンパス）みたいな試みは、非常に重要ですね。

ALUMNI 4
わが誇りの先輩たち

菅井 悠香さん Sugai Yuka

株式会社楽天野球団　人文学部社会科学科 2014年卒業

仕事は、速ければ可能性が広がる。違った可能性が生まれる。

日本プロ野球組織（NPB）がオーナー会議を開き、「来季からパ・リーグに参入する球団を、IT関連企業の楽天（三木谷浩史社長）とする」と正式に決めたのは、2004年11月。同年6月にオリックス・ブルーウェーブと大阪近鉄バファローズの合併構想が発表され、NPBは当初、「来季は11球団で運営する」と決定。この決定に、日本プロ野球選手会（当時、古田敦也会長＝ヤクルト）は、日本プロ野球界始まって以来のストライキを断行。「今からで来季に間に合うのか」と危ぶまれるなか、新球団は誕生した。球団名は「東北楽天ゴールデンイーグルス」（通称・楽天イーグルス。以下、楽天）。本拠地は仙台市の県営宮城球場（愛称・Koboパーク宮城）。プロ野球界初のIT関連企業の参入で、買収でなく新球団設立となるのは、1954年の高橋ユニオンズ以来、51シーズンぶりだった。セ・パ両リーグ6球団ずつの12球団制はこうして維持された。菅井悠香、13歳のときだった。彼女はのちに、設立当初「中途採用のみだった」という新球団の、新卒採用第一号となる。（敬称略）

就活では、何をやりたいのか、はっきりしていなかったのですが、「面白いことをやりたい」「自分を成長させられる環境に身を置きたい」、そんなことを念頭に置いて、いろいろな業種を受けましたね。最終的には地元が東北（出身は山形県）ということもあり、プロ野球界で働くなんて、なかなかないかなと思い挑戦しました。むかしからプロ野球観戦は好きですが、まさか、プロ野球球団で働けるとは思いませんでしたね。

入社して最初の配属は、プロモーション部。球団のWEBサイトの制作やSNSの担当で、アプリの企画運営などもしました。入社当初は、社員では一番若くて、20代前半の社員がほとんどいなかったこともあって、先輩方からとても優しくしてもらいましたね。…今思うと、珍しかっただけかも（笑）。週に一度、朝8時から楽天グループ全体の重要なテレビ会議があるのですが、今から思うとあり得ない行動を取っていました。その会議中に朝ご飯を食べていたんです。もちろん怒られました（笑）。ちなみに、会議は、英語のみ。最初は苦労しましたね。もっと大学で勉強しておけばよかったと、今でも後悔します。

なにしろ、新卒採用が初めてで、どう若い社員を育てるか、そういう環境がまだ整っていなかったので、当時はたいへんでしたよ。「自分でやって。出来て当たり前でしょ」みたいな雰囲気もあって（笑）。でも、上司には恵まれました。現場で実践する代わりに、面倒もよく見てもらいました。

今の仕事の魅力的なところ、たいへんなところでもありますが、スピードですね。社訓にも、「スピード!!スピード!!スピード!!」という言葉があります。「止まることなく、どんどん新しいことをやっていこう」、そういう社風は好きです。なにかひとつのことをやるぞとなったら、「じゃあ、明日までに」という世界（笑）。目標に向かって、みんなで全力でとりかかる、なんとかして実現する、その方法を探りだす、最初から「無理」と決めつけない…みんなでやり抜こうという気迫が職場に漲（みなぎ）っています。

2017年は、Team Management室という役員や選手たちのサポートをする部署で、主に社長の秘書業務を任されていました。秘書の仕事は、社長の何歩も先を歩かなければならない仕事。考えられる可能性にすべて対応できるよう、「こうおっしゃるんじゃないかな」「あれもありうるかも」と想定して、準備をします。ミスが許されない仕事ですから。難しい役割ですが、入社した頃には想像もできない仕事にこうして取り組んでいる自分を見ると、「成長したな」とちょっと自信が湧いてきますね。

2011年3月25日、楽天イーグルスは創設以来、初めてパ・リーグ開幕戦を本境地で迎える予定だった。ところが、3月11日に東日本大震災が発生。3月25日の開幕戦は延期となった。震災時、チームは兵庫県の明石市でオープン戦中で、選手は全員無事だった。震災後の4月2日、12球団によるチャリティー試合が行われ、楽天は札幌ドームで北海道日本ハムと対戦。この時、試合前に嶋基宏選手（当時選手会長）が被災地を想い自らの言葉で「見せましょう、野球の底力を。見せましょう、野球選手の底力を。見せましょう、野球ファンの底力を。共に頑張ろう東北！支え合おうニッポン！」とスピーチを行い、日本中に勇気を届けた。2013年初のリーグ優勝。また田中将大選手（現ニューヨークヤンキース）のパ・リーグ公式戦での24勝0敗1セーブという日本プロ野球史上初の無敗での最多勝を記録した。そして、日本シリーズでは巨人を相手に、最終第7戦までもつれた。第7戦では前日160球を投げた

プロフィール●1992年山形県生まれ。2014年、株式会社楽天野球団に就職、プロモーション部に配属となる。球団のWEBサイトの制作やSNS、アプリを担当。その後、Team Management室で社長・役員秘書の業務にあたる。趣味は旅行とゴルフ。

今、東北にある球団で仕事をしていて、ずっと東北を盛り上げていくべき、それが役割だと思っています。

田中将大選手が最終回を力投し、劇的なエンディングで巨人を下し初の日本一に輝いた。

震災の日、私は大学にいました。大学で最初の春休み中で、実家のある山形で車の免許を取って、茨城に戻ってきた翌日でした。バイト中に揺れが来て、一度アパートに帰ったら、部屋中がすごいことになっていて。友だちに連絡をしたら、「みんな、大学にいるよ」というので…。寒かったですね。茨苑会館に集まって、みんなで肌を寄せ合って温め合いました。怖くて、不安で。でも、みんなで励まし合っているうちに、少しずつ元気が湧いてきました。

みんなでひとつに、というと、今の会社にも通じるところがありますね。

私が入社したのは、2013年に日本シリーズで優勝した翌年でした。以来、3年。ずっと低迷していて…。でも、今季（2017年）はひと味ちがって、強かったですね。

順調にクライマックスシリーズまで進んで、ファーストステージで埼玉西武を下してファイナルステージまで進出しました。惜しくも福岡ソフトバンクには破れましたが、一戦一戦、本当に手に汗握る試合で、心底「勝ってほしい」と願いましたね。優勝の夢を最後の最後まで見させてくれた、選手の皆さんひとりひとりに感謝です。取ったり取られたり、勝ったり負けたりの世界ですから、一喜一憂、この上ない世界。そこがスポーツ業界で働いている楽しさでもあります。

そして何よりファンの皆さんが素晴らしい。仙台の人って、本当におおらかというか、優しいなと日ごろから思います。たとえば、ロッテに平沢大河選手という方がいます。平沢選手は、仙台の高校出身なのですが、ドラフトで惜しくも獲得が叶わなかった選手です。今季、うちのスタジアムでの対戦で、平沢選手はプロ入り初ホームランを打ったんです。すると、楽天ファンは、相手チームのホームランなのに大拍手。ホームランですから、球団としては複雑な心境ですが（笑）、優しい人たちだなと温かい気持ちになりましたね。楽天から移籍した選手が他球団の選手としてスタジアムに戻ってきても、拍手するんですから（笑）。勝つたびに、チーム、観客、そして社員がひとつになるんです。そんな一体感が生まれる職場です。仕事中にみんなでテレビを見ている不思議な職場ですが、それも仕事というか（笑）。「自分のチームを応援しないで、何をしてるんだ！」という世界です。先日（10月）のドラフト会議の時も、みんなで手を合わせて祈ったりしてました。プロの世界ですから、とても華やかな世界に映るかもしれませんが、私たちは裏方ですから、決して派手な仕事ではありません。でも、みんなで喜びを分かち合える世界は最高です。こうして会社が、人が、ひとつになるって、いいものですね。私の仕事のやりがい、支えは、そのあたりにあります。

philosophy

（楽天野球団から）内定をいただいていたので、「せっかくなら、仕事に直結するリアルな声を聴きたい」と、球団のスポンサーの方やファンの方々を紹介していただいて卒論は書きました。その方々とは今でも、いいお付き合いをさせていただいています。

history

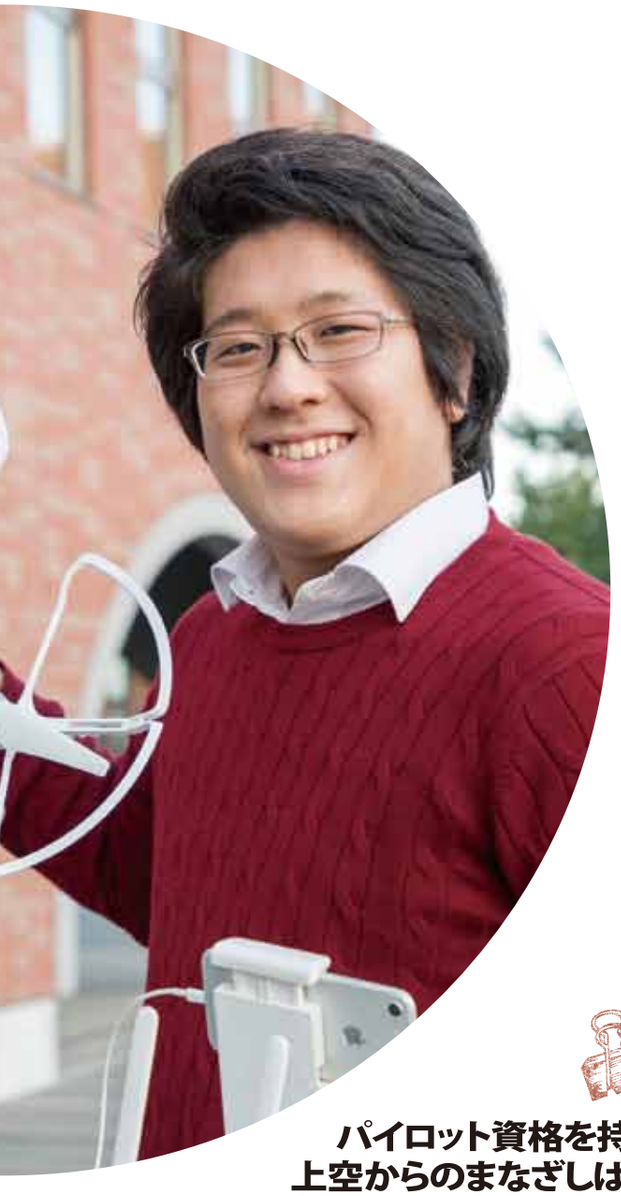
大学時代は旅行が好きで、アルバイトでお金を貯めては、旅行に行く、そんな学生時代でした。旅行の魅力は、新しい出会いや発見がいっぱいあること。人との出会いだったり、風景だったり。でも、やっぱりご飯が美味しいところが好きです（笑）。

message

（就職活動について）あまり深く考え込まずに、やりたいこと、楽しく生き生きと働けると思ったら、それを信じてやってみればいいんじゃないかなと思います。キャリアプランも大切ですが、今を全力で頑張ってくださいと伝えたいですね。

学生インタビュー●

「The 茨大生」



パイロット資格を持つドローン操縦士。上空からのまなざしは、温かく地域を見守る。

人文学部社会科学科3年生●正田　真悟さん

無人航空機（ドローン）が、キャンパス上空を飛行する。操縦士たちを指揮するのはプロのパイロットだ。
飛ぶことの素晴らしさを熟知しながら、その喜びをドローンに託し、
ドローンの目を通じて、人びとの感嘆と笑顔をみずからの糧とする。
司令塔の願いは、社会貢献、地域の活性化。
そのスペックは、日々成長し、思いは上へ上へと飛揚し続ける。

正田真悟は、空を飛んだ。

もともと、飛行機が大好きだった少年は、就学前から、空を見上げては「いつか飛んでみたい」と憧れた。憧れが現実に近づいたのは、高校3年の秋。正田は、ハワイのフライトスクール、つまり操縦士の免許を取る教習所への入学を決意する。

「日本で英語の勉強や航空関連の勉強をしながら、車や船の免許を取得して準備しました。フライトスクールは試験が終わるまで卒業できないので、最長半年くらいの覚悟での渡米でしたね」。

最初の教習のとき、いきなり、

「教官に『そこ（操縦桿）、引いたら、飛ぶからね』と言われて、えっ?! そんなにあっさりした説明で大丈夫なの?!て感じで（笑）。引いたら、本当に飛んだんです。浮かんだっていうか。あの感動は、忘れられないですよね」。

そこから、教習、管制塔との通信、教官との会話、試験、すべて英語の世界。筆記試験などを経て、資格試験の最後には、航空法について教官との面接、なんと２時間の口頭試験も待っていた。そして、１時間ほどの実技試験。

結果は、すべて合格。大学の入学式を欠席しての挑戦だったが、正田は大きな夢を叶えて、晴れて大学の門をくぐるのである。

茨大の人文学部（人文社会科学部）には、地域と連携した活動に興味をもっている学生も多く、授業以外も含めて県内外の各地で地域活性化につながるさまざまなプロジェクトに積極的に参加している。

そんななかで、正田の学生生活は、次の目標探しから始まった。

「せっかく免許を取ったのに、空に関わっていないなぁって。それで、何か社会に貢献できないかなと考えたところ、ドローンと出会ったんです」。

正田は航空技術研究会に所属する。折しも世の中にドローン（無人航空機）が羽ばたき始めたこの時期、茨苑祭で「ドローンの体験会を子ども向けにやろう」という企画が挙がった。結果は大好評で、その後、新学期が始まる時期に、「ドローンで部活の広報をしませんか」と掲げたところ、漕艇部やラグビー部などから声がかかった。

「大きなクラブチームでもなければ見られないような映像を提供できて、想像以上に学内外で役に立てると思いましたね」。

操縦はもちろんのこと、正田のパイロットとしての知識は、航空に関する法律や航空力学、航空気象など、ドローンの操縦のいたるところで役立ち、その信頼と期待は高まるばかりだ。正田たちは、地域イベントの撮影を通じて、地域活動に貢献しようというPR動画のプロジェクトなどを展開。プロ顔負けの知識と意気込みで地域活性化に貢献する。

2017年11月、自然災害時に正確な被災状況などをいち早く把握しようと、石岡市は正田が会長を務める航空技術研究会と「災害時におけるドローンによる情報収集等に関する協定」を結んだ。SNSで正田たちの活動を知った同市防災対策課の担当者が働きかけて実現した協定だ。

「近年、自然災害が多いですよね。被災状況をヘリコプターで撮るのは、かなり高額な費用がかかります。僕らだと迅速かつすぐに空撮に出動できて、しかも地上に近い高度で詳細に撮ることができるので、きっとお役に立てることがあると思います」。

この笑顔、きっと、空にあこがれていた少年時代とあまり変わらないのだろうと思いながら、正田の夢を聞いていたら、こちらも思わず、空を見上げたくなる。空は広く、すがすがしい。正田の未来は、そんな爽快感に満ちている気がする。（敬称略）

将来の夢ですか。
パイロット、航空管制官、
飛行機に携わる仕事がしたいですね。
ドローンを使って
事業を立ち上げるのもいいなあ。

❶正田さんは、11月に水戸キャンパスで開かれた「茨城県学生ビジネスプランコンテスト2017」に「ドローンを用いた動画撮影による地域活性化事業」をテーマに応募。見事、最優秀賞・茨城大学学長賞に輝いた。❷石岡市と災害時の情報収集協定を調印。石岡市では市内で大規模災害が発生した時に、地上から被害状況を把握することが困難な場合、正田さんたちのサークルにドローンによる撮影・画像情報の提供を要請することになっている。❸❹「だいたいこれで20万円くらい」とサークル所有の機体を操作する。距離は水平距離５kmくらい。高さは航空法上150mに制限される。時速50から60kmのスペック。フルハイビジョンの４倍の画素数で撮影できる４Kカメラを搭載している。❺操縦士の免許を取った後のソロフライトは、正田さんにとって一生忘れられない想い出だ。「他の島へひとりで飛ぶんです。無線はあっても、頼れる人は誰もいない。でも、最後のフライトだけは、試験と関係なく、機長として思うままに機体を操って空を飛べるんです。最高の感覚でしたね。」

IBARAKI UNIV. PRESS

「茨城大学 1dayキャンパス in 高校」

One Day Campus 土浦二高

High School 水戸二高

高校での初の試み、土浦二高、水戸二高で

2017年12月2日（土）、高校では初めてとなる「茨城大学1dayキャンパス」を、茨城県立土浦第二高等学校、茨城県立水戸第二高等学校で開催しました。いずれも、本学教員に加え各校出身の本学学生が高校を訪れ、「茨大研究入門ゼミ」とトークセッションを展開しました。

土浦二高では、1学年の生徒320名が出席。文系学部から4組、理系学部から4組の教員・学生が訪れ、1学年の8つの全クラスに分かれる形でそれぞれ2コマずつ「茨大研究入門ゼミ」を担当しました。後半はアリーナに移動し、太田寛行副学長の進行のもと、同校の卒業生から大学の紹介やエピソードが紹介され、会場は大いに盛り上がりました。

水戸二高では、文系志望の1・2年生の生徒20名が参加。同校卒業生を交えて、生徒ひとりひとりの声を聞きながら、和やかな雰囲気で大学での研究の楽しさを理解してもらいました。トークセッションでは木村競副学長も加わり、高校生の質問に、教員・学生が丁寧に回答。「どこで学びたいか、より、何を学びたいか」「大学は自分で時間をデザインする場所」といったメッセージとともに、女子高ならではの内容として、女性としての生き方・キャリアにも深く触れることになりました。

わたしの仕事 Vo.5

本との出会いは、人、世の中との出会い

大学の図書館に勤めて、8年になります。

子どもの頃、歩いて行けるくらいのところに公立の図書館があって、週に何冊も借りて読んでも、読みたい本が尽きなくて。図書館って広いなと思いながら、通ったものでした。本との出会いの場でしたね。大学時代も、本屋さんでアルバイトしたり。図書館で働くのが夢でした。

大学図書館は、教員や学生が研究を目的に利用するので、とても専門性が高い本が多いですね。私が今担当しているのは洋書なので、なかなかたいへんです（笑）。英語やドイツ語ならまだしも、ふだん触れることのない言語、アラビア文字とかですと、まったく読めないので、本を前にして「どう登録したらいいんだろう・・・」と固まってしまいます（笑）。ただ、そういう新しい刺激があるのも、この仕事の楽しいところです。

水戸キャンパスの図書館が増改築されて、この春で５年になります。本だけでなく、パソコンルームや、自習室、セミナールームなど、さまざまなニーズに合ったスペースがあって、学生にとって快適な学習環境が整っていると思いますね。

ここで働いていると、世の中はいろいろな要素が関わっていて、ひとつの分野が他の分野にちょっとずつ繋がっていているのがよくわかります。図書館や本を通じて、学生の皆さんには自分の専門だけではなくて、いろいろな分野との出会いをここで見つけてもらいたいなと願っています。

プロフィール 埼玉県出身。学生時代の専攻は心理学。卒論は江戸時代、浮世絵のファッション誌としての役割を考察するテーマに取り組みました。最近の趣味は観劇。シェイクスピアなどの古典からミュージカル、コメディまであらゆるジャンルを楽しんでいます。

学術情報課　図書館本館サービスグループ
永野 綾子さん

興味のある分野を深く掘り下げられるところが、大学っていいなと思いました。長田先生の「何をやりたいか、で大学を選ぶ」という言葉に共感しました。南アジアやインドに興味があって、大学では現地言語、政治経済、独特の法律、文化など、いろいろなことを学びたいですね。

仙波 彩夏さん（水戸二高・2年生）

大学は「難しい」「複雑だ」というイメージが少し柔らかくなった気がしました。文系に進むことは決めていますが、専攻はまだ。大学って楽しそうだな、行ってみたいなという気持ちが強くなりました。心理学の授業が印象的で、心理学についての見方が広がりました。

菱沼 雄介さん（土浦二高・1年生）

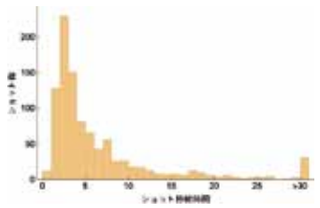
Math in Cinema 映画の中の数学

数値データで映画を分析

理学部准教授　長谷川 雄央

時間を計りながら映画を観たことはあるでしょうか？映画でカメラが切り替わることをショットが変わると言いますが、ショットの統計をとるとどのようなことがわかるのかを実際に試してみました。

図のヒストグラムは、ヒッチコック[1]監督の映画『サイコ』(1960年)においてショットの持続時間（ショットとショットの間）を数えたものです[2]。2秒にピークを持つ分布になっているのがわかります（平均ショット時間は約6.5秒）。全体の約4割を占める2〜3秒のショットは主に会話シーンの切り返しショットとして使われており、この映画の基調テンポとなっています。他にも、場面・状況説明には長時間のショットが、サスペンスを高めるためには1秒以下のショットが用いられ、『サイコ』におけるショットはだいたい三種類に分類できることが読みとれます。有名なシャワーシーンのようにサスペンスが最高潮に達した段階では、短いショットが立て続けに用いられます。このように、ショットの統計からその映画をコントロールしているテンポを知ることができます。



数値データで考えることは、他の映画との比較を容易にしてくれます。年代によってヒッチコック映画のテンポは変化したのか？同時代の映画とテンポは異なるのだろうか？国ごとにテンポの違いはあるのか？…そのような疑問をデータから解き明かせるかもしれません。数字のみの比較が映画分析の全てではありませんが、これまでと違った映画の見方をもたらしてくれるでしょう。こういった分析手法はcinemetricsと呼ばれ、ある程度研究もあるようです[3]。自宅で映画が観られる環境がある人は、一度試してみてはいかがでしょう？

[1]アルフレッド・ヒッチコック。サスペンス映画の巨匠。監督代表作に「めまい」「鳥」「裏窓」などがある。フランスの映画監督F・トリュフォーによるインタビュー本「定本　映画術　ヒッチコック・トリュフォー」（翻訳：山田宏一、蓮實重彦。晶文社）は名著として知られる。

[2]大雑把な測定です。手持ちのDVDプレーヤーでショットが切り替わる度に停止して、時間をチェックして記録しました（大変でした）。

[3]ネットで読める文章なら、Nick Redfern “An introduction to using graphical displays for analysing the editing of motion pictures”、Mike Baxter “Notes on Cinemetric Data Analysis”などがみつかる。

野心満々たれ

未来の記憶

理事・社会連携センター長
影山俊男

いっせいに草木が萌える賑やかな春もいいけれど、最近は木々の葉が力弱く大地に還る秋の深々とした静かさに心動く。

『秋深き隣は何をする人ぞ』

芭蕉の句の表面にあるのは淋しさなのだろうが、底にあるのは懐かしさなのかもしれないと、ふと。人が懐かしいと感じるのは「懐く」という言葉のように、自分が何かに属していると実感するとき、自分が自分を越えた何かの一部であると安心するときかもしれない。過去の記憶と結びついた懐かしい感情は秋にこそふさわしい。

同窓会や昔の職場の仲間たちの集いに声かかることが多くなった。楽しかったこと、一緒に苦労をしたことなど、思いの侭(まま)に話し合える仲間との会合はまさに懐かしい時間であり、忘れがちな昔日の自分と向き合う機会でもある。昔話に花は咲くが、それがいつでその時誰と一緒だったか「記憶」が互いに異なることがよくある。歳のせいと受け流すものの、仲間はそんな風に記憶していたのかと思い、また自分の記憶装置の精度に不審を抱いたりする。「過去は変えられない」はずだが、個人の記憶となると過去も変えられるものなのか。

少し前のことだが平野啓一郎氏の『マチネの終わりに』という小説を読んだ。物語展開で「過去は変えられる」というモチーフに興味を持った。記憶というものは意外と安定していなくて、脆いし、忘れるし、何度か思い返しているうちにその都度上書きされたように変わってしまうもののようだと。

「あの困難な状況を乗り越えたから今の自分がある」「あの時無駄としか思えなかった体験がこんな形で今に活かされている」というように、過去の認識の仕方によって記憶自体が変わっていくようだ。そして過去の認識を変えることは、結局、過去自体を変えることになるのか。過去は今の色で染められるもの、なのだろう。

秋色深まる晴天のもとで今年も恒例の「茨苑祭」が行われた。学生たちの溢れんばかりの笑顔には「未来」と言う文字が似合う。未来のいつか、この時間を懐かしく思い起してほしいものだ。

[プロフィール] かげやま としお
1970年茨城大学文理学部を卒業。常陽銀行に入行。郡山支店長、総合企画部長、執行役員、土浦支店長などを経た後、常陽産業研究所などで代表取締役社長を務める。2010年9月に茨城大学理事（社会連携）となり、2016年4月からは茨城大学社会連携センター長を兼務。

編集後記

■茨城のスーパーに並ぶ生鮮食品の充実ぶりは、他県に住んで比べてみるとよく実感できる。そんな「首都圏の台所」ともいえる農業県・茨城も、農業の担い手不足と市場のグローバル化といった課題に直面しており、大学の役割も問われている。行政関係者からは「一番人手がかかるのが収穫。AIやロボットの開発にも期待したい」という声も。どうなる!?茨大の“フードイノベーション”。（yam）

iup サークル紹介

バドミントン部

柔らかく、するどい シャトルを追う 機敏で激しい動きに魅了される

2016年、リオのオリンピックで日本のバドミントン界は沸きに沸いた。女子ダブルスで髙橋礼華・松友美佐紀ペアは日本人ペアとして初めて金メダル、女子シングルスでも、奥原希望が五輪初の銅メダルを獲得した。そんな波に乗る、馴染み深いバドミントン部を取材した。高校時代に卓球部に所属していた人文学部の佐藤夢加さん（２年生）は、「難しいスポーツだなと思いました。体力的にもそうですが、とにかく頭を使いますね。でも、そこが面白いというか」と、このスポーツを表する。

前主将の新井輝さん（工学部３年生）いわく、バドミントンの面白いところは、「駆け引き」という。一般に羽根と呼ばれるシャトルは、空気抵抗を受けやすいので、緩急を交えながら多彩な攻撃を展開する。「動きと緩急で、相手の裏を突くあたりが、試合運びの醍醐味ですね。」（新井さん）

練習は、ウォーミングアップ、基礎打ちから始まり、それぞれ自分のショットを確認したりしながら、ゲーム形式で仲間同士の試合に入る。コート全面フルに使って、フットワークやショットの精度などを磨いていく。シングルス、ダブルス独自の技や駆け引きなど、練習ではそれぞれの課題の克服に余念がない。シャトル独特の柔らかな、時に鋭い音が体育館に響く。機敏な動きは見ていて軽快だ。

教育学部の川嶋謙太さんは２年生。新しいチームの牽引役の一人だ。「高校時代は体力面とか精神面を鍛えてきましたが、大学からはもっとテクニックを鍛えるようになりましたね。」（川嶋さん）

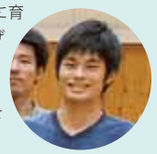
新歓祭で他部の見学に行ったところ、隣で練習する当部を見て、「かっこいい!」とその魅力に惹かれた和田みのりさん（人文学部２年生）は「バド部がきついというのは高校の時もよく聞いていて。入ったら、噂通りでした（笑）。レベルは高いのですが、先輩たちが一から優しく教えてくれるので、初めてでも一緒に切磋琢磨できるところがいいですね」と部の雰囲気に感謝する。

部員は、男女合わせて 24 名。みな口々に「雰囲気は明るい」と言う。それを裏付けるように、2017 年の北関東五大学選手権大会では ６連覇、関東甲信越大学体育大会では2連覇を果たした。現在、ノリに乗るサークルである。

バドミントン部
男女とも、未経験者歓迎。
創部：1960年
連絡先：Twitter→@ibadai_bad
練習日：毎週月水木土日（18:30 以降※体育館の予約状況による）
活動場所：大体育館（水戸キャンパス）

練習は男女別々、経験・未経験問わず、ともに汗を流しながら、それぞれの目標に向かって練習に励む。週５日の練習を基本に３キャンパスから学生が集まるなかで、いかに足並みを揃えるかは、他の部活同様、バドミントン部の課題でもあった。

主将の常住将平さんは、工学部２年生。やはり、意識するのは、チームの一体感と先輩たちの実績だ。「先輩方が部活の士気を高めてくれて、部活に対する情熱を高いレベルに育ててくれましたね。みんな、自分の技術を上げたいという意欲にあふれている気がします。」



春には大学同士のリーグ戦が始まる（関東学生バドミントン春季リーグ戦）。先輩たちを越え、さらなる高みをめざす。

水戸京成百貨店1階パサージュ通り

とろびせんほんぽ
都炉美煎本舗

TOROBI CAFE

とろびカフェ

甘味処のおもてなし

ご注文を頂いてから茹で上げる、最上級の国産粉を使った滑らかな白玉。北海道産小豆は、旨み・風味・甘さ、バランス良いあんこの礎。丁寧に深入りしたきなこ。お客様の召し上がった瞬間に見せてくれる笑顔がわたしたちは大好きです。もっと沢山の笑顔がみたいから、「おもてなしのこころ」を大切に精進いたします。ランチタイムには、姫御膳を始めます。どうぞお召し上がりください。

季節野菜のせいろ蒸し
姫御膳

白玉クリームあんみつ

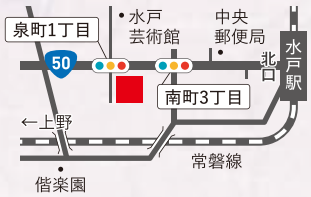
宇治抹茶 白玉クリームあんみつ

くずきり

わらびもち

都炉美煎本舗 とろびせんほんぽ

水戸市泉町1-6-1 京成百貨店1Fパサージュ通り
カフェ営業時間 11:00～17:00（ランチ 11:30～13:30）
TEL.029-350-2211



店舗は、水戸京成百貨店本館と駐車場の間に位置するパサージュ内にあります。

茨城大学広報誌「iUP（アイアップ）」vol. 11　発行日：平成30年1月5日
発行：茨城大学広報室 〒310-8512 茨城県水戸市文京2丁目1番1号 TEL：029-228-8008 mail：koho-prg@ml.ibaraki.ac.jp